

裴頠の「一屋之論」と南朝北朝の明堂

南澤，良彦
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門

<https://doi.org/10.15017/25110>

出版情報：哲學年報. 71, pp.177-201, 2012-03-09. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

哲学年報 第七十一輯 抜刷
平成二十四年三月九日 発行

裴頠の「二屋之論」と南朝北朝の明堂

南
澤
良
彦

裴頠の「一屋之論」と南朝北朝の明堂

南 澤 良 彦

序

「崇有論」で知られる西晉の裴頠（二七六～三〇〇）は、明堂に對し獨特の見解を持つており、それは東晉南朝の正史の中には僅かな記載しかないが、北朝隋唐の各時代に於ける明堂論の中では屢々言及される。北人はその裴頠の明堂論を「一屋之論」もしくは「一室之議」と稱し、それが經典に根據をもたないこと及び南朝の明堂がこの裴頠の論に依據して荒唐無稽であることを批判し、北人の建立した明堂の正統性を誇示した。裴頠の明堂論は北人にとって否定し去るべき南朝の惡しき明堂の象徴であり、北人の明堂論を構成する上で理論構築を負の面から補強する恰好の材料となったから、その資料價值は低くはない。裴頠の明堂論を検討して、その兩晉南朝に對する影響を検證し、北人の批判の根據を解明すれば、南北朝隋唐の明堂に對する觀念をより正確に理解し、延いては南北朝隋唐時代の明堂史及び經學史の特質をより明確に理解することに大きく貢獻するであろう。

私はこれまで南北朝隋唐時代の明堂の概要と其の經學史上の意義を各個に考察した¹⁾。本論考では裴頠の「一屋之論」を考察することによって、南北朝隋唐時代の明堂觀を總合的に研究し、南北兩朝それぞれの經學の特質

を説明する。

第一節 裴頠「一屋之論」の復元

裴頠の本傳は『晉書』卷三五にあり、

(裴)頠字逸民。弘雅有遠識、博學稽古、自少知名。……太康二年(二八二)、徵爲太子中庶子、遷散騎常侍。惠帝即位(二九〇)、轉國子祭酒、兼右軍將軍。……累遷侍中。時天下暫寧、頠奏修國學、刻石寫經。……頠深患時俗放蕩、不尊儒術、何晏・阮籍素有高名於世、口談浮虛、不遵禮法、尸祿耽寵、仕不事事、至王衍之徒、聲譽太盛、位高勢重、不以物務自嬰、遂相放效、風教陵遲、乃著崇有之論以釋其蔽曰、……⁽²⁾。
(頠字は逸民。弘雅にして遠識有り、博學にして古を稽へ、少きより名を知らる。……太康二年、徵されて太子中庶子と爲り、散騎常侍に遷る。惠帝即位し、國子祭酒に轉じ、右軍將軍を兼ね。……侍中に累遷す。時に天下暫らく寧らか、頠國學を修め、石を刻み經を寫することを奏す。……頠深く時俗の放蕩し、儒術を尊ばず、何晏・阮籍素より世に高名有るも、浮虛を口談し、禮法に遵はず、祿を尸し寵に耽り、仕へて事をとせず、王衍の徒に至り、聲譽太だ盛ん、位高く勢重けれども、物務を以て自嬰せず、遂に相ひ放效し、風教陵遲するを患ひ、乃ち崇有の論を著し以て其の蔽を釋して曰く、……)。

と記して、裴頠が博學多識、儒教に篤信であつたことを傳えるが、明堂に關する記述はない。

しかしながら、『宋書』禮志三は、劉宋大明五年(四六二)四月に孝武帝が發した明堂建立を命じる詔書の後に、

有司奏、「伏尋明堂辟雍、制無定文、經記參差、傳說乖舛。名儒通哲、各事所見、或以爲名異實同、或以爲名實皆異。自漢暨晉、莫之能辨。『周書』（『周禮』匠人）云、清廟・明堂・路寢同制。鄭玄注禮、義生於斯。諸儒又云明堂在國之陽、丙巳之地、三里之內。至於室宇堂个、戶牖達向、世代湮緬、難得該詳。晉侍中裴頠、西都碩學、考詳前載、未能制定。以爲尊祖配天、其義明著、廟宇之制、理據未分、直可爲殿、以崇嚴祀、其餘雜碎、一皆除之。參詳鄭玄之注、差有準據、裴頠之奏、竊謂可安。國學之南、地實丙巳、爽塏平暢、足以營建。其牆宇規範、宜擬則太廟、唯十有二間、以應期數。依漢『汶上圖儀』、設五帝位、太祖文皇帝對饗。……」乃依頠議。但作大殿屋雕畫而已、無古三十六戶七十二牖之制³⁾。

（有司奏すらく、「伏して尋ぬるに明堂辟雍、制に定文無く、經記參差して、傳說乖舛す。名儒通哲、各おの見る所を事とし、或は以て名異なるも實同じと爲し、或は以て名實皆異なると爲す。漢自り晉に暨ぶまで、之れを能く辨ずること莫し。『周書』に、清廟・明堂・路寢は制を同じくす、と云ふ。鄭玄禮に注し、義斯に生ず。諸儒又云く、明堂は國の陽、丙巳の地、三里の内に在り、と。室宇堂个、戶牖達向に至りては、世代湮緬として、該詳するを得難し。晉の侍中裴頠は、西都の碩學にして、前載を考詳すれども、未だ制定すること能はず。以爲らく祖を尊び天に配するは、其の義明著なるも、廟宇の制、理據未だ分らざれば、直だ殿を爲り、以て嚴祀を崇め、其餘の雜碎、一に皆之を除くべし。鄭玄の注を參詳するに、差準據有り、裴頠の奏、竊かに安んずべしと謂へり。國學の南は、地實に丙巳、爽塏平暢にして、以て營建するに足る。其の牆宇の規範は、宜しく太廟に擬則すべく、唯だ十有二間は、以て期數に應ず。漢の『汶上圖儀』に依り、五帝の位を設け、太祖文皇帝を對饗す。……」と。乃ち頠の議に依る。但だ大殿屋を作り畫を雕るのみ、古の三十六戶七十二牖の制無し。）

と續け、南朝劉宋の明堂が西晉の裴頠の議に依據したことを明言する。

裴頠の議を抜き出せば、「〔晉侍中裴頠、西都碩學、考詳前載、未能制定。以爲〕尊祖配天、其義明著、廟宇之制、理據未分、直可爲殿、以崇嚴祀、其餘雜碎、一皆除之。」という部分である。裴頠の明堂に關する文章は、幾つかの他書にも引用されており、多くはこの斷章を含んでより長文である。その概要を把握するために、次に他書の該當箇所を列舉しよう。なお、便宜的に括弧内に生卒年を挿入した。

○『魏書』袁翻（四七六―五二八）傳。裴頠又云、「漢氏作四維之个、不能令各處其辰、就使其像可圖、莫能通其居用之禮、此爲設虛器也。（漢氏四維の个を作れば、各おの其の辰に處らしむ能はず、就使し其の像圖すべくんば、能く其の居用の禮に通ずる莫く、此れ虛器を爲設するなり。）」⁴

○『魏書』李謐（四八四―五一五）傳。乃使裴頠云、「今羣儒紛糾、互相掎摭、就令其象可得而圖、其所以居用之禮莫能通也、爲設虛器耳。況漢氏所作、四維之个、復不能令各處其辰。愚以爲尊祖配天、其義明著。廟宇之制、理據未分。直可爲殿屋、以崇嚴父之祀、其餘雜碎、一皆除之。（今羣儒紛糾し、互相に掎摭し、就令し其の象得て圖すべくんば、其の居用の禮能く通ずる莫く、虛器を爲設する所以なるのみ。況んや漢氏の作る所、四維の个、復た各おの其の辰に處らしむ能はざるをや。愚以爲らく祖を尊び天に配するは、其の義明著なり。廟宇の制、理據未だ分らず。直だ殿屋を爲り、以て嚴父の祀を崇め、其餘の雜碎は、一に皆之を除くべし。）」⁵

○『隋書』牛弘（五四五―六一〇）傳。晉則侍中裴頠議曰、「尊祖配天、其義明著、而廟宇之制、理據未分。宜可直爲一殿、以崇嚴父之祀、其餘雜碎、一皆除之。（祖を尊び天に配するは、其の義明著なるも、廟宇の制、理據未だ分らず。宜しく直だ一殿を爲り、以て嚴父の祀を崇め、其餘の雜碎は、一に皆之を除くべし。）」⁶

○『隋書』宇文愷（五五五―六〇二）傳。『晉起居注』裴頠議曰、「尊祖配天、其義明著、廟宇之制、理據未分。

直可爲一殿、以崇嚴祀、其餘雜碎、一皆除之。(祖を尊び天に配するは、其の義明著なるも、廟宇の制は、理據未だ分らず。直だ一殿を爲り、以て嚴祀を崇め、其餘の雜碎、一に皆之を除くべし。)^⑦

一見して理解されるように、『隋書』の二傳所引は『宋書』禮志所引系統であるが、『魏書』袁翻傳所引は別系統であり、『魏書』李謐傳所引は最も長文で首尾が整い、しかも二系統兩方を過不足無く含む。したがって、『魏書』李謐傳所引の文章を裴頠の議の原文に近いと見なして大過なからう。そこで、本論考では『魏書』李謐傳所引の文章を裴頠の議として行論する。

また、裴頠の明堂説は、北魏の人士の間では、「一屋之論」^⑧「裴逸一屋之論」^⑨または「裴頠一室之議」^⑩と稱された。恐らく裴頠の議の「直可爲殿屋、……其餘雜碎、一皆除之。」すなわち、「ただ殿屋だけを造り、……それ以外の諸諸の要素はすべて排除する」という最も特徴的な記述を捉えてそう呼稱したのであり、これらの題目で呼ばれた裴頠の明堂説が『魏書』李謐傳所引の文章に述べられた説を指すことは間違いないからう。そこで、本論考では『魏書』李謐傳所引の裴頠の議を裴頠「一屋之論」と呼ぶことにする。

裴頠「一屋之論」を解釋すれば、「今(西晉惠帝期)群儒は明堂の制度について紛糾し、互いに批判した。もし勸戒のための圖像を描くことが可能であれば、そのような明堂は實際の儀禮を執り行うには不向きで、無用の長物を拵えてしまったと言う他ない。それよりひどいのが漢代の明堂である。これは東南・西南・東北・西北の四隅に个(小部屋)を設け、そこで儀禮を行ったため、季節ごとの儀禮とそれを行う場所の方角とが合致しなくなった。私が思うに、「尊祖配天」の義^⑪(郊に於いて祖先を祭祀し天に配する儀禮の標準)は經典に明記されている。それに對し明堂の制度は、理論の根據が不分明のままである。だから、ただ殿屋^⑫(柱だけで壁のない廣大な方形の建物)だけを造って先帝を宗祀し上帝に配する儀禮を盛大に行い、それ以外の明堂に附與された一切の餘計な屬性はすべて排除するのが宜しい。」ということになろう。

第二節 裴頠「一屋之論」の検討

裴頠が活躍した西晉惠帝期（二九〇～三〇六）は確かに明堂に關して儒者の間で議論が活發に行われていた時期である。晉の明堂制度は、理論的には魏の王肅の學說に依據して漢魏の制度を改めることから始められた。その最も重大な改革は、祭祀對象を五帝から昊天上帝に改めたことである。だが、その制度は永制とはならず、修正が繰り返された。元康元年（二九一）に摯虞（二五〇～三〇〇）は明堂の祭祀對象の變更を次のように上奏して提議した。

漢魏故事、明堂祀五帝之神。新禮、五帝即上帝、即天帝也。明堂除五帝之位、惟祭上帝。案仲尼稱「郊祀后稷以配天、宗祀文王於明堂以配上帝」（『孝經』聖治章）。『周禮』（春官宗伯・典瑞）「祀天旅上帝」、「祀地旅四望。」望非地、則上帝非天、斷可識矣。郊丘之祀、掃地而祭、牲用繭栗、器用陶匏、事反其始、故配以遠祖。明堂之祭、備物以薦、玉牲並陳、籩豆成列、禮同人鬼、故配以近考。郊・堂兆位、居然異體、牲牢品物、質文殊趣。且祖・考同配、非謂尊嚴之美、三日再祀、非謂不黷之義、其非一神、亦足明矣。昔在上古、生爲明王、沒則配五行、故太昊配木、神農配火、少昊配金、顓頊配水、黃帝配土。此五帝者、配天之神、同兆之於四郊、報之於明堂。祀天、大裘而冕、祀五帝亦如之。（『周禮』春官宗伯・司服）或以爲五精之帝、佐天育物者也。前代相因、莫之或廢、晉初始從異議。庚午（泰始二年、二六六）詔書、明堂及南郊除五帝之位、惟祀天神、新禮奉而用之。前太醫令韓楊上書、宜如舊祀五帝。太康十年（二八九）、詔已施用。宜定新禮、明堂及郊祀五帝如舊儀¹³。

（漢魏の故事は、明堂は五帝の神を祀る。新禮は、五帝は即ち上帝、即ち天帝なり。明堂は五帝の位を除き、

惟だ上帝を祭るのみ。案ずるに仲尼稱すらく、「后稷を郊祀し以て天に配し、文王を明堂に宗祀し以て上帝に配す」と。『周禮』に、「天を祀り上帝を旅す」、「地を祀り四望を旅す」と。望は地に非ざれば、則ち上帝は天に非ざること、斷じて識るべきなり。郊丘の祀は、地を掃いて祭り、牲には繭栗を用ひ、器には陶匏を用ひ、事其の始めに反る、故に配するに遠祖を以てす。明堂の祭は、備物以て薦め、玉牲並びに陳べ、籩豆列を成し、禮人鬼に同じくす、故に配するに近考を以てす。郊・堂の兆位、居然として體を異にし、牲牢品物、質文趣を殊にす。且つ祖・考配を同じくするは、尊嚴の美と謂ふに非ず、三日に再祀するは、不黷の義と謂ふに非ざれば、其の一神に非ざること、亦明らかにするに足れり。昔在上古には、生きて明王爲れば、没して則ち五行に配せらる、故に太昊木に配され、神農火に配され、少昊金に配され、顓頊水に配され、黃帝土に配せらる。此の五帝なる者は、天に配するの神、同に之に四郊に兆し、之に明堂に報ず。天を祀るは、大裘して冕し、五帝を祀るも亦之くの如し。或るひと以て五精の帝、天を佐け物を育くむ者と爲すなり。前代相ひ因り、之を廢すること或る莫けれども、晉初始めて異議に従ふ。庚午の詔書に、明堂及び南郊は五帝の位を除き、惟だ天神をのみ祀れ、とあり、新禮奉じて之を用ふ。前の太醫令韓楊上書して、宜しく舊の如く五帝を祀るべし、と。太康十年、詔して已に施用せしむ。宜しく新禮を定め、明堂及び郊に五帝を祀るのと舊儀の如かるべし。）

摯虞の上奏によれば、漢魏の明堂には五帝が祭られたが、その五帝は人帝の太昊（伏羲）・神農・少昊・顓頊・黃帝であり、彼らは生前の功績によって死後五行に配され天神に列せられたのだと言う。この摯虞の五帝解釋は、孔子の言葉として

昔丘也聞諸老聃、曰、「天有五行、水火金木土、分時化育、以成萬物。其神謂之五帝。古之王者、易代而改號、取法五行、五行更王、終始相生、亦象其義。故其爲明王者而死配五行、是以太皞配木、炎帝配火、黃帝配土、少皞配金、顓頊配水。……五行佐成上帝而稱五帝、太皞之屬配焉、亦云帝、從其號¹³。

（昔丘や諸を老聃に聞く、曰く、「天に五行有り、水火金木土なり、時を分け化育し、以て萬物を成す。其の神之を五帝と謂ふ。古の王者、代を易へて號を改め、法を五行に取り、五行更¹³も王たり、終始して相ひ生じ、亦其の義に象る。故に其の明王爲りし者にして死して五行に配され、是を以て太皞木に配され、炎帝火に配され、黃帝土に配され、少皞金に配され、顓頊水に配さる。……五行上帝を佐成すれば五帝と稱し、太皞の屬焉に配され、亦帝と云ひ、其の號に従ふ。）

と述べる『孔子家語』五帝篇に基づくと思われる。

周知の通り、五帝には様様な解釋があり、後漢の鄭玄（一二七―二〇〇）の説と三國魏の王肅（一九五―二五六）の説とがその代表である。王肅の説は、まさに『孔子家語』五帝篇の右の箇所の注に「天至尊、物不可以同其號、亦兼稱上帝・上天。以其五行佐成天事、謂之五帝。以地有五行、而其精神在上、故亦爲帝・五帝。黃帝之屬、故亦稱帝、亦從天五帝之號。（天は至尊、物は以て其の號を同じくすべからず、亦兼ねて上帝・上天と稱す。其の五行の天事を佐成するを以て、之を五帝と謂ふ。地に五行有りて、其の精神上に在るを以て、故に亦帝・五帝と爲す。黃帝の屬、故に亦帝と稱し、亦天の五帝の號に従ふ。）¹⁵と見える。天は至尊で唯一のものであり、「上帝」「上天」はその別名である。五帝とは地の五行の天上にある精神が天から分節して天の補佐をする時、そう呼ばれる。太皞・炎帝・黃帝・少皞・顓頊は五行に配されるので、（『禮記』月令のように）「帝」と稱し、五行の精神が五帝と稱されるのに従い「五帝」とも稱するのである。

鄭玄の説はいわゆる感生帝説で、『禮記』大傳の注に「王者之先祖、皆感太微五帝之精以生。蒼則靈威仰、赤則赤熛怒、黃則含樞紐、白則白招拒、黑則汁光紀。『孝經』曰「郊祀后稷以配天」配靈威仰也。」「宗祀文王於明堂以配上帝」汎配五帝也。（王者の先祖は、皆太微五帝の精に感じ以て生ず。蒼は則ち靈威仰、赤は則ち赤熛怒、黃は則ち含樞紐、白は則ち白招拒、黒は則ち汁光紀なり。『孝經』に「后稷を郊祀し以て天に配す」と曰ふは靈威仰に配すなり。」「文王を明堂に宗祀し以て上帝に配す」とは汎く五帝に配すなり。）」¹⁶と見える。太微は星座であり、青帝靈威仰等の五帝は星であり、天帝である。そして郊に於いて祭祀する「天」は太微五帝の中の、その王朝の始祖の感生帝であり、明堂に祭祀する「上帝」は太微五帝である。

摯虞は、「天」・「上帝」を同一視する王肅説に基づいて明堂・南郊の祭祀対象を昊天上帝だけに改めた泰始二年の改革の意義を否定し、五帝の祭祀の復活を提議した。しかしながら、摯虞は『孔子家語』及びその王肅注に従い、五帝を五行に配された明王であった人帝の太昊・神農・少昊・顓頊・黃帝（もしくは太昊・神農・少昊・顓頊・黃帝の姿を借りた五行の精神）だと理解し、鄭玄説の太微五帝説を採らないから、鄭玄の『孝經』解釋を採用したわけではない。また「昊天上帝を除いて五帝を祭る」とは書いていないので、あるいは昊天上帝の座位はそのままで、天帝ではなくその分節した補佐役に過ぎない五帝の祭祀は從祀の形態であったのであろう。

さて、裴頠「一屋之論」に戻ろう。右の摯虞の上奏に述べる建議は詔によつて承認されたが、西晉の儒學界では祭祀対象の他にも明堂の制度を巡る問題点は多多あり、裴頠の關心は主にその構造に向けられる。裴頠にとつて象（勸戒のための圖像）を描くことのできる明堂や、四隅に設けた小部屋で東西南北の方向に正對せず儀禮を行ふ漢代の明堂は儀禮の實施に不向きな「虛器（無用の長物）」に過ぎない。

「其象可得而圖」の「象」とは、『孔子家語』觀周篇に、「孔子觀乎明堂、觀四門墉有堯舜之容・桀紂之象、而各有善惡之狀・興廢之誠焉、又有周公相成王、抱之負斧扆、南面以朝諸侯之圖焉。（孔子明堂を觀、四門の墉に

堯舜の容・桀紂の象有りて各おの善惡の狀・興廢の誠有り、又周公成王を相け、之を抱きて斧辰を負ひ、南面し以て諸侯を朝せしむの圖有るを觀たり。」¹⁷とあるような、堯・舜・桀・紂の肖像畫、周公が成王を助けて諸侯を朝見させた情景の圖畫を指すのであらう。

『孔子家語』によれば、周の明堂を實見した孔子は、その四門の牆壁にそのような圖畫を確認したが、裴頠の考へでは、圖畫の存在は「所以居用之禮莫能通」すなわち實際の儀禮を行う上での障礙になるだけである。ただし勸戒のための圖畫が明堂で行う特定の性質の儀禮にとつて邪魔になるのか、それとも明堂の構造上、圖畫を設置する構造物が儀禮の實施にとつて障礙になるのかは不明である。もともと右の『孔子家語』の記載を除いて、西晉までの歴代の明堂に圖畫が描かれた事實を伝える記録はない。『孔子家語』に觸發されて西晉時代の儒者の間で浮上したアイデアの一つだったのだろう。

「漢氏所作、四維之个、復不能令各處其辰。」については、『禮記』月令篇とその鄭玄注及び『水經注』卷一六穀水の條が參考になる。『禮記』月令篇とその鄭玄注には明堂に設置された「个」についての記述がある。点綴すれば

- 月令卷一四孟春。 「天子居青陽左个。」（注「青陽左个大寢東堂北偏。」）
- 月令卷一五仲春。 「天子居青陽大廟。」（注「青陽大廟、東堂當大室。」）
- 月令卷一五季春。 「天子居青陽右个。」（注「青陽右个東堂南偏。」）
- 月令卷一五孟夏。 「天子居明堂左个。」（注「明堂左个大寢南堂東偏也。」）
- 月令卷一六仲夏。 「天子居明堂太廟。」（注「明堂太廟南堂當太室也。」）
- 月令卷一六季夏。 「天子居明堂右个。」（注「明堂右个南堂西偏也。」）

- 月令卷一六中央土。「天子居大廟大室。」(注「大廟大室中央室也。」)
- 月令卷一六孟秋。「天子居總章左个。」(注「總章左个大寢西堂南偏。」)
- 月令卷一六仲秋。「天子居總章大廟。」(注「總章大廟西堂當大室也。」)
- 月令卷一七季秋。「天子居總章右个。」(注「總章右个西堂北偏。」)
- 月令卷一七孟冬。「天子居玄堂左个。」(注「玄堂左个北堂西偏也。」)
- 月令卷一七仲冬。「天子居玄堂大廟。」(注「玄堂大廟北堂當大室。」)
- 月令卷一七季冬。「天子居玄堂右个。」(注「玄堂右个北堂東偏。」)⁽¹⁸⁾

となる。月令の規定では、天子は季節ごとに明堂の中の青陽(東堂)・明堂(南堂)・總章(西堂)・玄堂(北堂)の四つの堂に立ち入って儀禮を行うが、この四つの堂はまたそれぞれ左个・大室・右个に三分される。鄭玄の解釋では、それぞれの左右の「个」は大廟の各堂の左右に偏在するとされ、十二の月ごとに日月會合の天空の位置と斗建の辰とをいちいち注記し⁽¹⁹⁾、十二個月の十二辰と明堂四堂の四大室八个とを完全に對應させているから、个の位置は青陽左个から順に東北東・東南東・南南東・南南西・西南西・西北西・北北西・北北東だと思われる。しかしながら、青陽右个と明堂左个とで東南の室を、明堂右个と總章左个とで西南の室を、總章右个と玄堂左个とで北西の室を、玄堂右个と青陽左个とで北東の室をそれぞれ共用するとする説も有力であり⁽²⁰⁾、實際の漢の明堂についても、北魏の地理學者酈道元(四六九〜五二七)が五二五年頃に著した『水經注』卷一六穀水に「穀水又東逕平昌門南、故平門也。又逕明堂北。漢光武中元元年(五六)立。尋其機構、上圓下方、九室重隅十二室。蔡邕月令章句同之。故引水于其下爲辟離也。」⁽²¹⁾とあるように、「重隅」を「共用する」の意で取れば、後漢洛陽の明堂の八个は實は四室であつたことになる⁽²²⁾。

裴頠は、「四維之个」と言うのだから、今の位置は「四維」すなわち「東南・西南・東北・西北」²³である。後漢洛陽の明堂の个は「重隅」しており、まさに「四維」の位置にあった。その位置する方角は、明堂月令の「其辰」すなわち月ごとに配当され十二支で表された方角とは、方角の分け方が異なるのだから、當然ならざるでいる。「漢氏所作」の明堂もまた儀禮實施の嚴密性という觀點からすれば、壯麗ではあるが、儀禮の成果は十全に得られない「虚器」なのである。

裴頠は、以上のような悪しき前例を踏まえて、ある一つの明堂プランを提示する。すなわち、明堂の制度は文献の記載がまちまちで論據が定まらないので、ただ「殿屋」だけを建造し、そこで先帝を天に配祀する儀禮を盛大に行い、それ以外の零細で雑多な（と裴頠が見なした）要素はすべて排除する、というプランである。「殿屋」とは「柱だけで壁のない廣壯な方形の建物」である。五室・九室の争い、室・堂の區別、今の重隅問題等、これら一切の論争の原因は、複雑な内部構造の故に生じた。裴頠は間仕切りを一切設けない明堂を建立することによって不毛な論争に終止符を打とうとしたのである。

そしてその明堂では、「崇嚴父之祀」すなわち『孝經』聖治章に「宗祀文王於明堂以配上帝」と明確に記された儀禮のみを行う。明堂に關わる問題はその構造の問題だけではなく、そこで行う儀禮にもまた種種の問題があった。明堂は祭祀の場であるとともに施政の場であり、養老の場とも教學の場ともされた。裴頠はそれら明堂の諸機能の中から祭祀をのみ選擇した。それは明堂祭祀が正統的な經典である『孝經』に明記されており、それほど權威を確立された裏付けを持たないその他の儀禮とは異なり、比較的紛糾を免れると考えたからであろう。

裴頠は西晉を代表する經學者であった。それ故に／それにも拘わらず、經學者の陥りがちな議論のための議論を回避し、意想外の明堂プランを提出した。この一種諸諱的なプランはやがて南朝人士の嗜好に合致したと見え、彼らの明堂計劃の中に採用されるのである。もっとも、その融通無碍さが災いし北人の間ではきわめて評判が悪

く、裴頠「一屋之論」はその經學的根據（理據）の無さによって恰好の批判の對象とされた。論争の局外中立に身を置こうとしたことが却って批判の原因となったのである。

第三節 裴頠「一屋之論」と南朝時代の明堂との關係

西晉・東晉を通じて、裴頠「一屋之論」が採用された形跡はない。はじめて裴頠の議を採用したのは、南朝劉宋王朝である。第一節で見たように、『宋書』禮志三は劉宋の明堂について、「有司奏、……參詳鄭玄之注、差有準據、裴頠之奏、竊謂可安。國學之南、地實內巳、爽壇平暢、足以營建。其墻宇規範、宜擬則太廟、唯十有二間、以應期數。依漢『汶上圖儀』、設五帝位、太祖文皇帝對饗。……乃依頠議、但作大殿屋雕畫而已、無古三十六戶七十二牖之制。」と記す。

「但作大殿屋」というのは裴頠「一屋之論」の提案通りだが、「雕畫」はむしろ裴頠の憎むところである。それ以外にも、鄭玄の學說や漢代の『汶上圖儀』（前漢武帝に公玉帶が獻上した『黃帝時明堂圖』）等からの要素も混在し、裴頠「一屋之論」系統の要素と確定できるのは、「其墻宇規範、宜擬則太廟、唯十有二間、以應期數。」の箇所だけである。明堂と太廟・路寢とが同制であるとは鄭玄の説だが、劉宋の太廟は『宋書』禮志三に「宋武帝……既即尊位（四二〇）、乃增祠七世右北平府君・六世相國掾府君爲七廟。……高祖崩（四二二）、神主升廟、猶從昭穆之序、如魏・晉之制、虛太祖之位也。廟殿亦不改構、又如晉初之因魏也。」²⁴とあり、晉代の太廟に倣ったことが分かる。晉代の太廟については、同書に、「孝武皇帝太元十六年（三九一）、改作太廟、殿正室十六間、東西儲各一間、合十八間。棟高八丈四尺、堂基長三十九丈一尺、廣十丈一尺。堂集方石、庭以埽。」²⁵と記載さ

れ、その規模の数値が分かる。劉宋の明堂の「墻宇規範（外壁と屋根の規格）」はこの晉・宋の太廟に範を取り、期數（一年十二個月の數）に對應させて、長さを十二間に縮小したのである²⁶。

南齊の明堂については、『隋書』禮志一に、「陳制、明堂殿屋十二間。中央六間、依齊制、安六座。」²⁷とあるのが参考になる。陳の明堂は十二間の「殿屋」を有し、その中央六間に「齊制」に依って、五帝と配帝との六座を安置したというのだ。齊の制度に依ったのは直接には座位の配置だが、儀禮の施行と儀禮の場所とは密接な關係にあるのだから、殿屋が十二間の長さというのも齊の制度に依ったと見て良からう。そうすると、「明堂殿屋十二間」という要素が共通するのみだが、齊の明堂は劉宋と同制であつたと見られ、その點で裴頠「一屋之論」の明堂プランを採用したと言うことは可能であらう。

梁の明堂は『隋書』禮志一に、「於是毀宋太極殿、以其材構明堂十二間、基準太廟。以中央六間安六座、悉南向。……大殿後爲小殿五間、以爲五佐室焉。」²⁸とある。梁の明堂は宋・齊とは異なり、梁の武帝の強力なイニシアティブによる獨特な構造となつたが、『魏書』李業興傳に、「（天平）四年（東魏、梁の大同三年、五三七）、（蕭）衍散騎常侍朱異問（李）業興曰。……業興曰、「我昨見明堂、四柱方屋、都無五九之室、當是裴頠所制。明堂上圓下方、裴唯除室耳。今此上不圓何也。（四年、衍の散騎常侍朱異業興に問ひて曰く、……業興曰く、「我昨明堂を見たり、四柱方屋、都て五九の室無く、當に是れ裴頠の制する所なるべし。明堂は上圓下方なるに、裴は唯だ室を除きたるのみ。今此れ上は圓ならざるは何ぞや」と。）²⁹という興味深い記事がある。梁の朱異（四八三～五四九）と東魏の李業興（四八四～五四九）との問答の検討は次節に譲るが、ここでは、李業興が實見した梁の明堂が「四柱方屋、都無五九之室、當是裴頠所制。」だつたことに注目したい。北朝の儒者の眼からは、梁の明堂は何よりもまして裴頠のプランの影響が明瞭に窺えたのである。

陳の明堂も右の齊の條で見た通り、齊の明堂制度に準據しており、裴頠「一屋之論」の影響下にあると言える。

第四節 裴頠「一屋之論」と北朝隋唐時代の明堂論との關係

裴頠の死（三〇〇年）後まもなく、華北一帯は戰亂の地となり、洛陽の明堂は顧みられなくなった。やがて華北を統一した北魏は平城に都を置き、孝文帝の太和一五年（四九一）その地に明堂を建立した。北魏は早くから儒學を奨励し、洛陽遷都以前すでに、五經博士を置き太學を初めとする學校を立て、後漢の鄭玄・服虔・何休（二二九～一八二）等の學問を教學し、魏晉の王肅・杜預（三二二～二八四）の經解も通行していた。

平城の明堂を制作したのは李冲（四五〇～四九八）という人物で、彼が主として依據したのは鄭玄の經說と蔡邕（一三二～一九二）の『明堂月令論』である。もともと李冲は優れた「巧思」の持ち主で、平城の明堂は經學に根據を持つとはいえ、多分に李冲個人の天才が發揮されたオリジナルな作品であり、特定の學說に偏することはない。例えば、上圓下方、左个・右个を設けた點で鄭玄說を踏まえ、十二堂九室、靈臺・辟雍と一體である點で蔡邕說を採用し、プラネタリウム狀の裝置である「機輪」を備えた點は全くの獨創である。この平城明堂は洛陽遷都後批判を集める。

洛陽遷都（四九三）後、新首都に明堂を建立する要望は日日高まり、ついに正始三年（五〇六）十二月世宗道武帝は明堂修建の詔を發した。この時に袁翻が奏議して、平城明堂のでたらめを批判し、經典に基づく鄭玄說を支持し、漢代の制度を損益したに過ぎない蔡邕說を否定する。裴頠「一屋之論」は最初、漢代の明堂說が經典を蔑ろにした證據として引用され、次いで漢代の明堂說からさえ逸脱している漢代の實際の明堂とともに否定すべき代表とされて、「晉朝亦以穿鑿難明、故有一屋之論、並非經典正義、皆以意妄作、茲爲曲學家常談、不足以範時軌世。」と批判される。袁翻はこの上奏を「庶有會經詰、無失典刑。識偏學疏、退慚謬浪。」と述べて終る。袁翻にとって重要なのは、經典を十分理解し、典範から逸脱しないことであり、淺薄な知識のために物事が粗雑に

なることなのだ。意圖的に經典を無みしようとするかのような裴頠「一屋之論」は袁翻にとって許容できない妄説なのである⁽³⁰⁾。

李謐も世宗期の人物であるが、その「明堂制度論」の中に最も長文の裴頠「一屋之論」を引用し、續けて、

斯豈不以羣儒舛互、並乖其實、據義求衷、莫適可從哉。但恨典文殘滅、求之靡據而已矣。乃復遂去室牖諸制。……余竊不自量、頗有鄙意、據理尋義、以求其真、貴合雅衷、不苟偏信。乃藉之以禮傳、考之以訓注、博採先賢之言、廣搜通儒之說、量其當否、參其同異、棄其所短、收其所長、推義察圖、以折厥衷⁽³¹⁾。

(斯れ豈に羣儒舛互し、並びに其の實に乖けるを以て、義に據り衷を求むるも、適きて従ふべき莫きにあらざらんや。但だ典文の殘滅するを恨み、之を據る靡きに求むるのみ。乃ち復た遂に室牖の諸制を去る。……余竊かに自ら量らず、頗る鄙意有り、理に據り義を尋ね、以て其の真を求むるには、合を貴び衷を雅とし、苟くも偏信せず。乃ち之を藉るに禮傳を以て、之を考ふるに訓注を以てし、博く先賢の言を採り、廣く通儒の說を搜し、其の當否を量り、其の同異を參へ、其の短とする所を棄て、其の長とする所を收め、義を推し圖を察し、以て厥の衷を折らん。)

と述べる。裴頠は群儒が批判し合い、明堂制度の實から乖離したと考え、諸文獻を涉獵し、それらの中に明堂制度の「義」(標準)を見出して折衷案を決定しようとしたが、徒に文獻が消滅したと残念がるあまり、「靡據」(無根據)の說を唱えた、と李謐は批判する。

李謐の「明堂制度論」に於ける方法論は、總合と折衷とを重視し、理論の方から標準を導き出し、その眞實を追究する、というものである。具体的には、經典をメインに位置づけ、優れた注釋や先賢・通儒の學說を廣範に

探求し、それらを総合的に比較検討して、標準や圖面を推察し、折衷案を練るのである。このような視點から過去の文献を再検討した李謐から見れば、鄭玄さえ「通儒」と評價しながら、經典の解釋に緯書等の「異端」を交えたことを問題視し、後學が論争に勝利するためには異端の利用を躊躇無くする基を作ったと批判する³²のだから、裴頠「一屋之論」は無根據である點でなおさらその安易な立論方法が咎められるのだ。

東魏の李業興と梁の朱异との間で行われた梁の明堂についての問答は次の通りである。

（天平）四年、（蕭）衍散騎常侍朱异問（李）業興曰：……。業興曰、「我昨見明堂、四柱方屋、都無五九之室、當是裴頠所制。明堂上圓下方、裴唯除室耳。今此上不圓何也。」异曰、「圓方之說、經典無文、何怪於方。」業興曰、「圓方之言、出處甚明、卿自不見。見卿錄『梁主孝經義』³³亦云上圓下方、卿言豈非自相矛盾。」异曰、「若然、圓方竟出何經。」業興曰、「出『孝經援神契』。」异曰、「緯候之書、何用信也。」業興曰、「卿若不信、靈威仰・叶光紀之類經典亦無出者、卿復信不。」异不答³⁴。

（四年、衍の散騎常侍朱异業興に問ひて曰く、……。業興曰く、「我昨明堂を見たり、四柱方屋、都て五九の室無く、當に是れ裴頠の制する所なるべし。明堂は上圓下方、裴は唯だ室を除きたるのみ。今此れ上は圓ならざるは何ぞや」と。异曰く、「圓方の説は、經典に文無ければ、何ぞ方なるを怪しまん」と。業興曰く、「圓方の言は、出處甚だ明らかなるに、卿自ら見ず。卿の錄せる『梁主孝經義』に亦上圓下方と云ふを見れば、卿の言豈に自ら相ひ矛盾せるに非ざらん」と。异曰く、「若し然らば、圓方竟に何れの經に出づるか」と。業興曰く、『孝經援神契』に出づ」と。异曰く、「緯候の書、何を用てか信ぜんや」と。業興曰く、「卿若し信ぜざれば、靈威仰・叶光紀の類は經典にも亦出づること無き者、卿復た信するや不や」と。异答へず。）

李業興は、儒學を以て仕える家に生まれたが、彼自身は本傳に、「業興少耿介、志學精力、負軼從師、不憚勤苦。耽思章句、好覽異說。……後乃博涉百家・圖緯・風角・天文・占候、無不詳練、尤長算歷。」³⁵と記され、東魏の鄴遷都に際し、首都設計の圖面校定を委嘱された人物であった³⁶。彼は、梁の明堂が「無室」である點が裴頠「一屋之論」に依據することをまず述べるが、批判の矛先は「上圓下方」の理念に乖離する點に向けられる。梁の武帝の著書に緯書（『孝經援神契』）由來の「上圓下方」の言が見え、その武帝の建立した梁の明堂では五帝として靈威仰・叶光紀等を祭祀した³⁷。それにも拘わらず、裴頠「一屋之論」に便乗して上下共に方形の殿屋を建立して「上圓下方」の象徴性を排除したことが咎められたのだ。

明堂が經學的價值觀によってではなく政治的價值觀によって語られる時、裴頠「一屋之論」はもはや批判對象の論據の一つにすぎず、「經典からの逸脱」等のそれ自體に對する經學的批判からは免責される。この傾向は續く隋代に顯著である。

隋代の牛弘は裴頠「一屋之論」を引用して、「宋・齊已還、咸率茲禮。此乃世乏通儒、時無思術、前王盛事、於是奉行。（宋・齊已還、咸茲の禮に率ふ。此れ乃ち世に通儒乏しく、時に思術無く、前王の盛事、是に於いて行はれず。）」³⁸と續け、また宇文愷は同様に、「臣愷案、天垂象、聖人則之。辟雍之星、既有圖狀、晉堂方構、不合天文。既闕重樓、又無壁水、空堂乖五室之義、直殿違九階之文。非古欺天、一何過甚。（臣愷案するに、天は象を垂れ、聖人之に則る。辟雍の星、既に圖狀有り、晉堂方構なるは、天文に合はず。既に重樓を闕き、又壁水無く、空堂は五室の義に乖き、直殿は九階の文に違ふ。古に非ず天を欺くこと、一に何ぞ過甚だしき。）」³⁹と續ける。

この兩者は經學に造詣は深いが、經學者を以て任じてはおらず、前者は儀禮の實務に精通した官僚政治家であり、後者は工學技術者の頂点に立つ將作大匠であった。官僚政治家の批判の矛先は裴頠「一屋之論」の缺陷にで

はなく、それを無反省に信奉した南朝の學術全般の停滞に向けられている。將作大匠は實際に滅亡後の陳の首都に入り、その明堂址を實地檢分しており、それが、「雖湫隘卑陋、未合規摹、祖宗之靈、得崇嚴祀。」⁽⁴⁰⁾ すなわち狹隘な規模であるけれども祭祀は可能であったことを證言しており、その一點では裴頠の目的は達成されていたが、宇宙論的には著しく適格性に缺けることを批判する。ただし宇文愷たちは、明堂制度、延いては禮制が基本的に周制を信賴すべき古制としながらも、經典に全面的に依據する必要はなく、時代の變化に追従し、經典の規範を取捨選擇して構わない、と認識していた。この信念から裴頠「一屋之論」はその動機ではなく、その結果で批判されたのである。

最後に唐の魏徵（五八〇～六四三）の批判を見ておこう。『舊唐書』禮儀志二に次の様にある。

稽諸古訓、參以舊圖、其上圓下方、複廟重屋、百慮一致、異軫同歸。洎當塗（曹魏）膺籙、未遑斯禮。典午（晉）聿興、無所取則。裴頠以諸儒持論、異端蜂起、是非舛互、靡所適從、遂乃以人廢言、止爲一殿。宋・齊即仍其舊、梁・陳遵而不改。雖嚴配有所、祭享不匱、求之典則、道實未弘。……凡聖人有作、義重隨時、萬物斯覩、事資通變。若據蔡邕之說、則至理失於文繁、若依裴頠所爲、則又傷於質略。求之情理、未允厥中。⁽⁴¹⁾

（諸の古訓を稽へ、參ふるに舊圖を以てすれば、其の上圓下方にして、複廟重屋なるは、百慮一致し、異軫歸を同じくす。當塗籙を膺くるに洎び、未だ斯の禮に遑あらず。典午聿めて興り、則を取る所無し。裴頠諸儒論を持し、異端蜂起し、是非舛互して、適きて從ふ所靡きを以て、遂に乃ち人を以て言を廢し、止だ一殿を爲るのみ。宋・齊即ち其の舊に仍り、梁・陳遵ひて改めず。嚴配するに所有り、祭享匱きずと雖も、之を典則に求むれば、道實は未だ弘からず。……凡そ聖人作る有り、義は隨時を重んずれば、萬物斯に覩、事

通變に資る。若し蔡邕の説に據れば、則ち理文繁に失ふに至り、若し裴頠爲す所に依れば、則ち又質略に傷ふ。之を情理に求むれば、未だ厥の中に允^{あた}らず。）

魏徵は李謐の「明堂制度論」の措辭を踏まえながら、裴頠「一屋之論」を「無據」ではなく、「以人廢言」⁽⁴²⁾すなわち恣意的な價值判斷に基づく論であるとして批判し、裴頠「一屋之論」の影響下にある南朝四朝の明堂が祭祀の儀禮には十分だが、國家の儀禮建築としては十全な機能を有していないことを述べる。魏徵は隋代の二人に負けず劣らぬ實務家であり、經典に記された事物さえ「隨時」「通變」することを認識していたから、裴頠の「一屋之論」も一概に否定せず、ただその「質略」に過ぎる點を残念に思ふのである。

結 語

裴頠は、群儒の明堂論争が決着を見ないのは、「理據」すなわち理論的根據とすべき經典の不足に原因があると考え、「一屋之論」すなわち經典に根據のない「殿屋」だけを建立し、「崇嚴父之祀」の儀禮だけを行うプランを建議した。

南朝に於いては、劉宋の明堂が裴頠「一屋之論」に依據したことは、正史『宋書』に記述される。續く南齊・梁・陳の三王朝の明堂も裴頠「一屋之論」の影響下にあることは、北朝隋唐側の論者達の主張するところであり、歴代正史に記述されるそれらの構造からそれは確認される。

しかしながら、南朝の明堂制度はいずれも、裴頠「一屋之論」に依據しつつ且つ独自の工夫を凝らした。劉宋

は明堂に「雕畫」し、その長さを「應期數」して十二間とした。「雕畫」は裴頠が明堂を「虛器」にする要因だと禁忌した事象であり、明堂の規模をことさら「期數」に對應させた象徴性は裴頠が排除すべき「其餘雜碎」すなわち餘計な下等の屬性に他ならない。南齊は明堂祭祀に配帝を置かなかつた⁴³。裴頠は明堂に於いて唯一實施すべき事柄は、「崇嚴父之祀」すなわち先帝を上帝に配祀する儀禮だと主張したのでから、南齊の明堂制度はその構造こそ裴頠「一屋之論」に則つてはいるが、その趣旨とは全く背馳すると言わざるを得ない。梁の明堂は五帝を祭祀する無室の明堂（大殿）の他に、その後方に左右の今の附隨する小殿が設けられ、そこで五佐を祭り聽朔の儀禮を行つた⁴⁴。梁の明堂制度もまた裴頠「一屋之論」の趣旨から大きく逸脱している。

南朝の諸王朝は、明堂問題のアポリアをエポケーという方法で解決した裴頠「一屋之論」を採用することによつて、従前の華北に於ける經學論争をリセットし、新たな明堂論議を開始することを可能にした。その結果、裴頠「一屋之論」さえ相對化し、王朝ごとに獨特なる特徴を有する明堂制度を創出したのである。

北朝隋唐に於いては、裴頠「一屋之論」はごく稀な場合を除き⁴⁵、常に排斥の對象であつた。北魏世宗期の袁翻や李謐のような儒學者達にとつて、裴頠「一屋之論」は、傳統的經學の範疇を逸脱した異端の論說であるが故に批判の對象であつた。東魏の李業興のような方術的傾向のある儒學者にとつては、裴頠「一屋之論」は明堂の象徴的要素を剝奪したが故に批判對象となつた。隋の牛弘や宇文愷のような實務に長けた官僚政治家達は、明堂制度も含め禮制が相對的であり、經典も取捨選擇が許されると考えるから、裴頠「一屋之論」自體はもはや批判體象ではなく、南朝明堂の宇宙論的象徴性缺如の要因として批判される。

異民族出身でありながら中華の中心に政權を樹立した北朝及び隋の諸王朝は、一方では古典中國の完璧な繼承者たらんとし、明堂に關する學問的遺産を可能な限り網羅的に研究し、一方では新興勢力ゆえの南朝への對抗意識から、中國傳統の宇宙論的象徴性の演出を過剰なまでに彼らの明堂に施した。經學的背景と象徴性との兩方

を缺如する裴頠「一屋之論」の明堂觀は北朝隋王朝のそのの對極にあり、漢人政權ながらも隋を繼承して北朝系の王朝であつた唐王朝に於いてはもはや、「質略（みすぼらしい）」と同情される有様であつた。

南北兩朝の經學の特徴を、「南人約簡、得其英華、北學深蕪、窮其枝葉。」⁴⁶と言ひ表した『隋書』儒林傳の言葉は蓋し至言であるが、明堂制度に關してもこの言葉は妥當であることは、裴頠「一屋之論」の檢討を通してより一層明確になつた。南朝の明堂は裴頠「一屋之論」に觸發され、シンブルに理念を昇華させた様式となり、北朝の明堂は裴頠「一屋之論」の對極に立つ壯大な骨董的意匠のパッチワークとなつたのである。

注

- (1) 南澤良彦「南朝宋時代における明堂創建と謝莊の明堂歌」（九州大學中國哲學研究會、『中國哲學論集』第三三號、二〇〇七年）、同「南朝宋齊時代の明堂」（九州大學大学院人文科學研究院、『哲學年報』第六九輯、二〇一〇年）、同「北魏と隋の明堂」（『哲學年報』第七〇輯、二〇一一年）、同「唐代の明堂」（『中國哲學論集』第三六號、二〇一〇年）。
- (2) 『晉書』卷三五裴頠傳、北京、中華書局、一九七四年、一〇四一～一〇四二頁。なお、本論考では正史は中華書局の評點本シリーズのものを使用し、その頁番號を記す。
- (3) 『宋書』卷一六禮志三、四三四頁。
- (4) 『魏書』卷六九袁翻傳、一五三七頁。
- (5) 『魏書』卷九〇李謐傳、一九三二頁。
- (6) 『隋書』卷四九牛弘傳、一三〇〇～一三〇五頁。
- (7) 『隋書』卷六八宇文愷傳、一五八八～一五九三頁。
- (8) 『魏書』卷六九袁翻傳、一五三八頁。
- (9) 『魏書』卷七二賈思伯傳、一六一五頁。

- (10) 『魏書』卷八五邢臧傳、一八七一頁。
- (11) 「義」原作「儀」、他書の引用に従い、「義」に改めるが、「儀」の語義に近い「模範とすべき標準的仕様」の意に解釋する。
- (12) 殿屋について張一兵『明堂制度研究』（北京、中華書局、二〇〇五年）は、「殿屋在南北朝、是一種剛剛定型的禮制建築形制、其特徵是平面長方形、屋頂用正脊一條、短于面寬（一般約五分之三或二分之一）、與場邊平行、正脊兩端向下延伸到四角、形成四條垂脊、宋代以後稱作〴〵廡殿頂、近代以來稱作〴〵四面坡水。」（三九一頁）と述べる。後述のように、南朝の明堂はいずれも裴頠の明堂プランの影響下にあるので、證明の順序は逆だが、「但作大殿屋雕畫而已、無古三十六戸七十二牖之制」（宋代の明堂。『宋書』禮志三、四三四頁）、「四柱方屋、都無五九之室」（梁代の明堂。『魏書』李業興傳、一六八二頁）という南朝の明堂の構造的特徴を歸納して裴頠の「殿屋」を「柱だけで壁のない廣壯な方形の建物」と定義する。
- (13) 『晉書』卷一九禮志上、五八七頁。
- (14) 『孔子家語』卷六、五帝、四部叢刊、初編縮本、臺北、臺灣商務印書館、一九六七年、二九頁。
- (15) 『孔子家語』卷六、五帝、三國魏、王肅注、二九頁。
- (16) 『禮記』卷三四大傳、阮元刻『十三經注疏』本、北京、中華書局、一九八〇年二冊本、一五〇六頁。
- (17) 『孔子家語』卷三觀周、六五頁。
- (18) 『禮記』卷一四一七月令、一三五五～一三八三頁。
- (19) 『禮記』月令卷一四孟春の「孟春之月、日在營室、昏參中旦尾中」に「日月之行、一歲十二會、聖王因其會而分之、以爲大數焉。觀斗所建命其四時。此云孟春者、日月會於諷訢、而斗建寅之辰也」と注され、卷一五仲春の「仲春之月、日在奎、昏孤中旦建星中」に「仲春者日月會於降婁、而斗建卯之辰也。」と注され、「季春」以下も同様に月ごとに日月の會合と斗建の位置とが明記される。
- (20) この問題については、池田秀三「黃侃《禮學略說》詳注稿（一）」（京都大學中國哲學史研究會、『中國思想史研究』第二八號、二〇〇六年）、二八八～二九一頁を参照。
- (21) （北魏）酈道元『水經注』卷一六穀水、楊守敬・熊曾貞『水經注疏』本、南京、江蘇古籍出版社、一九八九年、一四二五頁。
- (22) 後漢洛陽の明堂の考古學的研究は、王世仁『中國古建築探微』（天津、天津古籍出版社、二〇〇四年）「明堂形制初探」三九～五七頁を參照。また詳細な報告書がある。中國社會科學院考古研究所『漢魏洛陽故城南郊禮制建築遺址一九六二～一九九二年考古發掘報告』、北京、文物出版社、二〇一〇年。
- (23) 「四維」を「東南・西南・東北・西北」とするのは、『淮南子』天文訓に「帝張四維、運之以斗、月徙一辰、復反其所。……日冬至日出東南維、入西南維、……夏至日出東北維、入西北維。」（『新編諸子集成』本、北京、中華書局、一九八九年、一一〇・一二九頁）とあるに

依る。

- (24) 『宋書』 卷一六禮志三、四四九頁。
- (25) 『宋書』 卷一六禮志三、四四八頁。
- (26) 劉宋の明堂の復元圖とその説明は張一兵『明堂制度源流考』（北京、人民出版社、二〇〇七年）一五一～一五五頁を参照。
- (27) 『隋書』 卷六禮志一、一二二頁。
- (28) 『隋書』 卷六禮儀志一、二二〇～二二二頁。
- (29) 『魏書』 卷八四李業興傳、一八六二～一八六三頁。
- (30) 『魏書』 卷六九袁翻傳、一五三八頁。詳しくは注(1)所掲南澤「北魏と隋の明堂」第四節を参照。
- (31) 『魏書』 卷九〇李謐傳、一九三一～一九三三頁。
- (32) 注(1)所掲南澤「北魏と隋の明堂」第四節を参照。
- (33) 『梁書』 卷三武帝紀に「中大通四年、五三三」三月庚午、侍中、領國子博士蕭子顯上表置制旨『孝經』助教一人、生十人、專通高祖所釋『孝經義』。」(七七頁)とあり、『隋書』卷三三「經籍志一」に『孝經義疏』十八卷。梁武帝撰。」(九三四頁)と著録される。
- (34) 『魏書』 卷八四李業興傳、一八六二～一八六四頁。
- (35) 『魏書』 卷八四李業興傳、一八六一頁。
- (36) 『魏書』 卷八四李業興傳、一八六二頁に、「遷鄴之始、起鄴郎中辛術奏曰、『今皇居徙御、百度創始、營構一興、必宜中制。上則憲章前代、下則模寫洛京。今鄴都雖舊、基址毀滅、又圖記參差、事宜審定。臣雖曰職司、學不稽古、國家大事非敢專之。通直散騎常侍李業興、碩學通儒、博聞多識、萬門千戶、所宜訪詢。今求就之披圖案記、考定是非、參古雜今、折中爲制、召畫工并所須調度、具造新圖、申奏取定。庶經始之日、執事無疑。』詔從之。」とある。
- (37) 注(1)所掲南澤「南朝齊梁時代の明堂」第二節を参照。
- (38) 『隋書』 卷四九牛弘傳、一三〇三頁。
- (39) 『隋書』 卷六八宇文愷傳、一五九二頁。
- (40) 『隋書』 卷六八宇文愷傳、一五九三頁。
- (41) 『舊唐書』 卷二二禮儀志二、八五〇頁。
- (42) 『論語』 卷一五衛靈公篇に、「子曰、君子不以言舉人、不以人廢言。」(阮刻『十三經注疏』本、二五一八頁)とある。
- (43) 注(1)所掲南澤「南朝齊梁時代の明堂」第一節を参照。

(44) 注(1)所掲南澤「南朝齊梁時代の明堂」第二節を参照。

(45) 『魏書』卷八五邢臧傳に、「邢臧、字子良、河間人、光祿少卿虬長孫也。幼孤、早立操尚、博學有藻思。年二十一、神龜中、舉秀才、問策五條、考上第、爲太學博士。正光中(五二〇)五二五)、議立明堂、臧爲裴頠一室之議、事雖不行、當時稱其理博。」(一八七五頁)とある。もともと、稱賛されたのは、邢臧の博識であつて、裴頠の「一室之議(一屋之論)」ではない。

(46) 『隋書』卷七五儒林傳序、一七〇六頁。

